

## 平成27年度 附属学校園存続のための特色化にかかわる事業実施報告書

事業の名称	保護者や地域・大学の人材を活用した新しい子育て支援のカリキュラム開発
事業実施代表者名	齊 藤 緑 附属函館幼稚園副園長
実施附属学校名	附属函館幼稚園
事業内容 (実施内容について、 1,000字程度で記述)	<p>附属函館幼稚園では、平成22年度に全国の国立附属学校では初となる預かり保育「附幼きりのこきっず」の取組を開始した。以来園のスタッフや保護者・地域・小学校・大学の人材などが協力して、「預かり保育」や「子育て支援事業」を展開することによって、「通常の保育活動」と「預かり保育活動」の有機的な連携を図り、その教育効果を高めることや、保護者の互助によるより豊かな子育て支援の場と経済性を兼ね備えた新しい「預かり保育」の形態を次の4つの場として提案し、事業を展開してきた。</p> <p>①「家庭生活との連続性を考えながら、家庭的で落ち着いた雰囲気の中で過ごすことができる場」</p> <p>②「教育課程に関わる保育時間や家庭では経験できない活動、かかわりを経験することができる場」</p> <p>③「子育てに関する情報を得、保護者同士が気軽に相談でき、保護者の子育てを具体的に支援する場」</p> <p>④「幼稚園と家庭、保護者が在園児全員の成長にかかわる連携的意識を醸成する場」</p> <p>これを受けて、「わくわくの日（異年齢の友だちとともに好きな遊びをしながら、家庭的な雰囲気で過ごす日）」、「イベントの日（お母さん先生や外部講師の方などが来て、事前に企画した楽しい活動をして過ごす日）」、「講座の日（外部講師が来て、何回かにわたり、子どもが楽しく取り組みながら習い事をする日）」、「トークの日（子どもを園に預かりながら、子育てについて日頃から気になっていることを、先輩お母さんと気軽に話し合える日）」、の4つの具体的な形態を作って預かり保育を行ってきた。今年度は、幼児期においてより多様な体験ができるように充実をはかること、特に食育の観点から、「おやつの実践」を推進した。さらに学生ボランティアを募り、互惠成のあるイベントや講座を多く企画した。そしてこれらを先進的な取り組みとして、全国や地域の幼稚園に求められた情報や資料の形にして提供してきた。</p>

<p>成果と課題 (活動の成果と課題について、500字程度で記述)</p>	<p>成果としては、各月の計画の中にバランスよく4つの預かり保育の形態を配置し、基本的に週2回(火曜日と木曜日)実施した。総回数65回、のべ1167人の園児が参加し、1回あたりの平均が18人、最大時には40人の参加があった。イベントや講座では、キッズエアロビクスや、外国人の先生と外国語を使ったゲームなどを実施した。お母さん先生では、英語で遊ぶ講座とダンスを行う講座と読み聞かせが各2回実施された。大学の吹奏楽団員が訪問し音楽教室を開催したり、ダンス部と一緒によさこいを踊ったり、サッカー部員が遊びを楽しませながらサッカーを行う教室を3回開催した。音楽鑑賞ではサクソフォンや歌の先生をお招きし、子どもの興味・関心をひく演奏を聞かせていただいた。茶道体験(2回)や日舞などもあり、日本の文化に親しむことも体験した。</p> <p>おやつは、地域の店舗に依頼し特製のお菓子を用意したり、体に良い素材の多様なおやつを提供したりして工夫を凝らした。結果子供の好き嫌い克服にも繋がり、親子の良い食育活動となった。</p> <p>これらの取り組みと来年度の予定を広報することで、若干ではあるが、来年度入園志願者の増加にも繋がったといえる。</p> <p>しかし来年度の予算内ではこのような企画は多くは実施できず、学生や保護者などのボランティアの活用を募ったり、おやつも「ハレの日」と「ケの日」のメリハリをつけたりして、予算組みすることが必要である。</p>
<p>今後の発展性 (残された課題の解決方策及び取組の方向性について、500字程度で記述)</p>	<p>保護者も子どもも「預かり保育」に期待しているのは、「講座の日」や「イベントの日」などの習い事的な要素である。しかし少子化が進み家庭に帰ってからも安心して遊ぶことができる環境が少なくなっている昨今、様々な遊びを通した異年齢の日常的な交流にも「預かり保育」の良さがあると考えます。それと同時に、来年度から預かり保育は毎日となり、長期の休みも行うので、子育て支援の見地から、時間的なニーズに応じることも大切になる。技芸講師やゲストティーチャーを伴う内容は日程調整やおやつ準備も含めて担当している教諭と綿密に計画をたてていきたい。</p>
<p>事業の公表状況</p>	<p>HPで公開・園児募集案内で紹介・体験入園時に説明</p>